（ 別 紙 ２ ）

# 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名　　綿 村　英 一 郎

本論文は、刑事事件の被告人に対する刑罰の判断（量刑判断）に、判断者が自覚できない潜在的（無意識的）な側面があるということ、およびそれが実際の量刑判断に影響しているということを初めて立証した研究である。本論文は、7 つの実証的な研究を含む 4 つの章から構成されている。

第 1 章では、法の素人の量刑判断に関する先行研究を概観し、1）素人の量刑判断は概して応報的である（被害の大きさに釣り合った刑罰を与えようとする）ということ、2）それにもかかわらず、素人は自身が応報的な判断をしていることを充分に自覚してはいないということを明らかにした。「素人の実際の量刑判断と自覚との間には乖離がある」というこの事実を説明するために、本論文では、社会的認知の二重過程理論に基づいて、「素人の量刑判断には、本人が自覚できない潜在的なレベルで応報的動機が強く影響している」という仮説を立てた。しかし、これまでは、無意識的なレベルでの応報的動機を測定する方法は存在しなかった。そこで、本論文では、潜在的連合テストを応用して、応報的動機を測定する方法を新たに開発し、この方法を用いて、上記仮説の検証を行なった。

第 2 章では、この新たな方法による実験を行ない、量刑判断のもとになる刑事事件についての資料を呈示すると、潜在的なレベルで応報的動機が活性化する、という事実を明らかにした。さらにその活性化は、1）非粗暴事件よりも粗暴事件のほうが強く、2）被告人が充分に罰せられていないときに限って生じるということをも明らかにした。

第 3 章では、潜在的レベルでの応報的動機が実際に量刑判断に影響しているのかどうかを検証した。一連の実証的研究の結果、潜在的レベルでの応報的動機は、1）量刑判断の個人差のもとになっており、2）応報的な量刑判断を正当化しうる他の判断材料が存在する場合には、量刑判断に影響する、ということが明らかになった。

第 4 章では、これらの研究結果と先行研究の知見を総合的に考察し、「素人の量刑判断に応報的動機が影響するのは、潜在的なレベルにおいてであるため、量刑判断に応報的動機が影響していることが本人には充分に自覚されない」という上記の仮説が妥当であると結論した。

本論文は、潜在的なレベルでの応報的動機を測定するために新たな方法を提案し、その有効性を立証している。従来の量刑判断研究においては、潜在的な心理過程の重要性は認めつつも、実証的な検証は行なっていなかった。本論文が提案した新たな方法は、そうした検証を可能にしたという点で、大きな意義を持っている。本論文で行なわれた実証的な研究は、実際の法廷とは幾つかの相違があり、その点では更なる研究が必要とされるものの、素人が法の規範とは異なる判断をする可能性があることなど、社会的に重要な知見を幾つも示している。以上の点から、本審査委員会は、本論文が博士（心理学）の学位に値するとの結論に達した。